

博物館 Dictionary No.216

◆あなたに語る・時代を超えて生きる心◆

特別企画「京博寄託の名宝」に展示されている作品について勉強してみよう。

足利義政もあこがれた 文人のすてき生活

みなさんは、文人^{ぶんじん}ということばを知っていますか？もとは中国語です。詩を作ったり、書道に打ちこんだり、絵を描いたり、琴をかなでたりするのに秀でた人・・・たくさん^{ひい}の書物^{しょもつ}を読み、礼節^{れいせつ}もわきまえ、しかもりっぱな芸術に通じていた、超文系^{ちやうぶんけい}の「スーパー・インテリ・アーティスト」のことをいいます。「そんな風になってみたい」と、中国でも日本でも、学問が好きな人はみな、あこがれました。今日は、その文人^{ぶんじん}の暮らしがテーマ^{てま}になっている文房具^{ぶんぼうぐ}を紹介^{しょうかい}します（図1）。



図1 黒漆楼閣人物文螺鈿印籠
中国 元～明時代(14～15世紀) 京都・大徳寺蔵

写真手前の四角い台（①）のまんなか、四角い箱がつくりつけられています。写真左の四角い入れもの（②）は、うんとあげ底につくられていて、手前の台（①）のうえにのせると、台につくりつけられた箱の蓋^{ふた}にもなります。さらにそのうえに、奥^{おく}の四つ足つきの箱（③）がかぶさって同じように蓋^{ふた}にもなり、最後に右手の大きな蓋^{ふた}（④）が3段^{さんだん}の箱をすっぽりとおおいます。展示^{てんじ}

室^{しつ}でみると、各段^{だん}に朱肉^{しゆにく}のあとがあるのがわかります。そう、これは印章^{いんしやう}（はんこ）や朱肉^{しゆにく}を入れる箱^しなのです。詩や書道や水墨画^{すいぼくが}に熱心^{ねっしん}に取りくんだ文人^{ぶんじん}たちは、完成作品^{ぶつせい}に押す印章^{おし}にもたいへん凝^こりました。印章^{いんしやう}入れも、書斎^{しよさい}に欠かせない大切な文房具^{ぶんぼうぐ}でした。

作品に近づいて文様^{ぶんさやう}を見てみましょう。とてもこまかく切った貝^{かい}がらを箱^{はこ}の表面^{うら}にはりつけて漆^{うるし}を塗り、貝^{かい}の上^{うへ}の漆^{うるし}をはがして文様^{えが}を描^{えが}きだしています。貝^{かい}の表面^{うら}に針^{はり}で細かい線^{せん}を彫^ほっているところもあって、きわめて精緻^{せいち}です。

一番外側^{いちばんがわ}の蓋^{ふた}（④）の天面^{てんめん}には、松^{まつ}の樹^{じゆ}のしたで囲碁^{いご}に興^{おこ}じる文人^{ぶんじん}たちが描^{えが}かれています（図2）。囲碁^{いご}は自分の陣地^{じんち}を拡大^{かくだい}していく戦略^{せんりやく}ゲームです。賢^{かしこ}くないと勝^{かち}てません。中国^{ちゆうごく}では、琴^{こと}、書^{しよ}、画^えとあわせて文人^{ぶんじん}たちが嗜^{たしな}むべき四^よつの芸道^{げんどう}のひとつに数^{かず}えられていました。



図2 蓋(④)の天面 囲碁を楽しむ文人たち

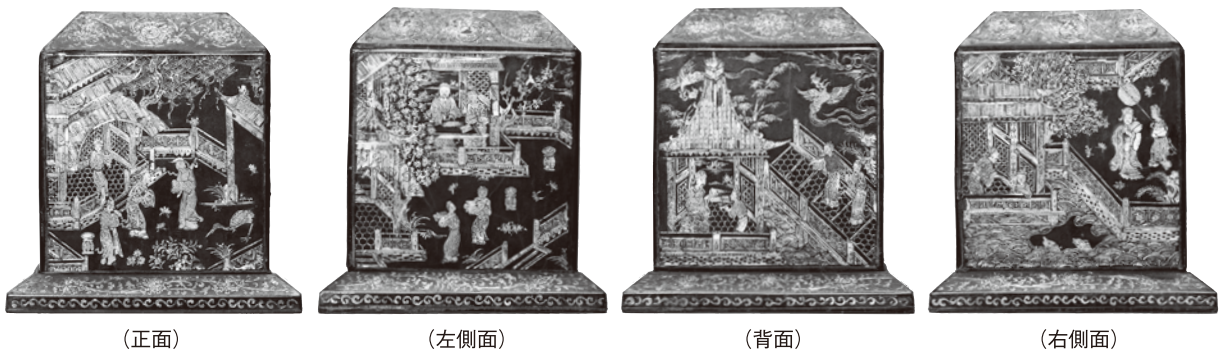


図3 印籠の四側面

側面も見てみましょう（図3）。

正面では、蝶が舞い、鶴が遊ぶ庭で、文人が客を迎えいれています。背後の門には「迎僊」と書かれています。俗世間をはなれて清らかに生きる不老不死の仙人を迎えるという意味です。左側面では、書齋を意味する「書堂」の文字の書かれた建物のなかで、ふたりの学者が親しげに語り合っています。背面では、涼しげな東屋のかたわらで天に



図4 右側面の部分拡大その1 魚と龍

向かって竹がの伸び、そのまわりをおめでたい霊鳥である鳳凰が飛んでいます。右側面では、魚と龍がそろって池から顔を出して（図4）、文人のそばには柄の長い団扇を持った女性がかえています。目を凝らして見ると、その団扇にはこれらの図を説明するように「道院迎仙客／書堂隱相儒／庭栽棲鳳竹／池養化龍魚」の文字が彫られています（図5）。これは文人生活の理想をうたった中国の古句で、万暦年間（1573～1620）には存在していた格言集、『昔時賢文』にも収められています。



図5 右側面の部分拡大その2 団扇の文字

じつは、この印章入れの底面には朱漆で「慈照院御物」と書かれています。慈照院は、第8代室町将軍、足利義政（1436～90）のこと。御物とあるのは、義政の遺品であったことを示しています。将軍の持ちものならば、印章入れが中国からの高級な輸入品であってもおかしくありません。義政は超文系の芸術愛好家として知られます。きっと彼も、文人気分を盛り上げるために、まことに文人らしいこの道具を、愛用したのでしょうね。

（工芸室 永島明子）